

ぼいす

北区飛鳥山博物館だより
2016.9.20

37

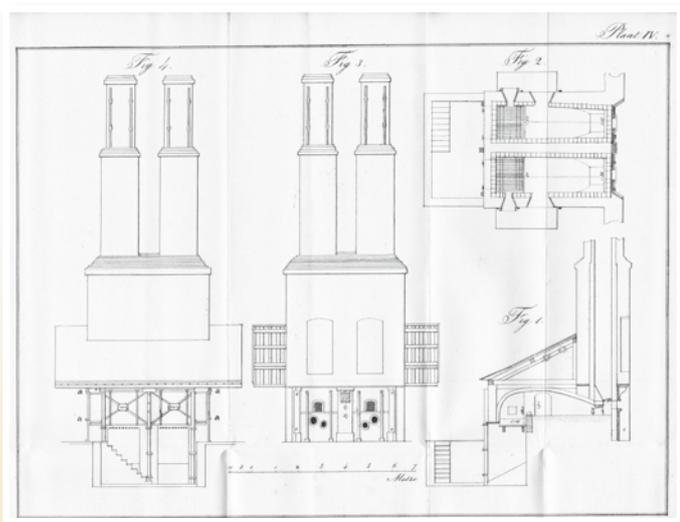
秋 期 企 画 展

日本・ベルギー友好150周年

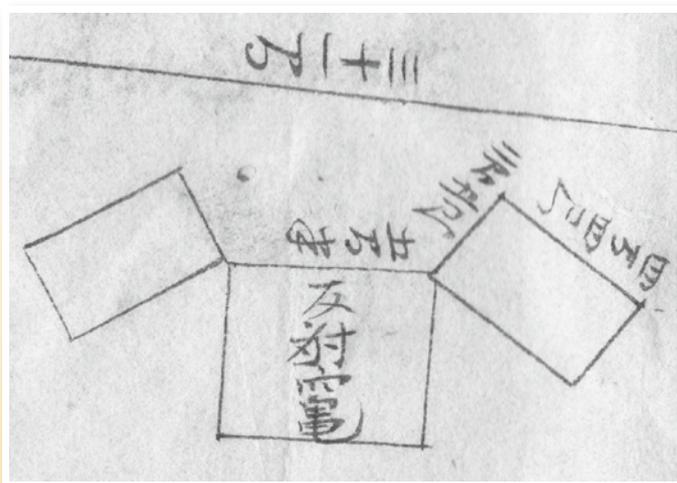
近代工業化のルーツ滝野川反射炉展

—まなぶ・つくる・うけいれる—

Le 150ème anniversaire des relations amicales entre la Belgique et le Japon : Four à réverbère de Takinogawa, l'origine de la modernisation industrielle japonaise – Apprendre, fabriquer et intégrer –



ヒューニゲン著 「反射炉技術書」(浅川道夫氏所蔵)



戸部家文書 滝野川造兵司管轄所六百分之一(部分)(戸部安雄氏所蔵)

会 期

平成28年10月25日(火)～12月11日(日)

時 間

午前10時～午後5時

会 場

北区飛鳥山博物館 特別展示室・ホワイエ

休 館 日

毎週月曜

観覧
無料

日本・ベルギー友好150周年

近代工業化のルーツ滝野川反射炉展

—まなぶ・つくる・うけいれる—

このたび北区飛鳥山博物館では、「日本・ベルギー友好150周年 近代工業化のルーツ滝野川反射炉展—まなぶ・つくる・うけいれる—」を開催するはこびとなりました。

江戸時代末期、幕府は現在の北区滝野川に反射炉ならびに大砲製造所、そして後には火薬製造所の建設を計画し、西欧の技術を積極的に学び、先進技術の国産化を急ぎました。反射炉建設には洋式要塞・五稜郭を設計した武田斐三郎が加わり、また火薬製造所築造には幕臣・沢太郎左衛門がオランダ・ベルギー留学の成果を活用し、最新の海外技術移転をはかりま

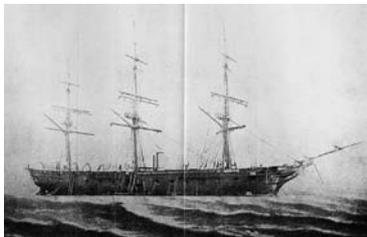
した。やがてその試みは明治以降、地域の近代化・工業化の礎となりました。滝野川の工業立地化は、そこに住む人々の生活にも大きな影響を与え、さまざまな形で時代状況に関わり地域像の変貌を受容していきました。

地域像が工業化とともに大きく変容を遂げた明治時代、駐日ベルギー王国公使・ダヌタン男爵夫妻は、日本の近代化と伝統文化との調和に興味を深め、



幕臣 沢太郎左衛門

東京郊外の名所・王子・滝野川をこよなく愛されました。本年は日本とベルギー王国が通商修好条約を締結して150年の節目の年にあたります。今後の末永い両国の交流の進展を願うとともに、このささやかな展示を通じて過去の深いつながり



幕府旗艦 開陽丸

について思いをはせてみたいと思います。(石倉)

[企画展関連イベント]

セミナー

日 時:11月5日(土)午後1時30分~2時15分

会 場:講堂・特別展示室

講 師:梶原利夫氏(産業考古学会会員)

演 題:滝野川反射炉と火薬製造所の立地特性

定 員:30名

申 込:往復はがきで 10月25日(火)締切

記念講演会

日 時:12月3日(土)午後1時30分~3時10分

会 場:講堂

講 師:鈴木一義氏(国立科学博物館産業技術史資料情報センター長)

小西雅徳氏(法政大学講師)

演 題:近代産業技術移転と反射炉

西洋兵学受容と大砲製造

定 員:80名

申 込:往復はがきで 11月18日(金)締切

レクチャー

日 時:12月4日(日)午後1時30分~3時10分

会 場:講堂

講 師:保垣孝幸氏(東京学芸大学講師)

黒川徳男氏(國學院大學講師)

演 題:幕末期地域史からみた滝野川地域の工業化

明治初年地域史からみた滝野川地域の工業化

定 員:80名

申 込:往復はがきで 11月18日(金)締切

VOICE

発掘してわかる土地利用

遺跡のニュースでも耳にする「遺構」という用語は、考古学でよく使いますが、遺構とは建物や墓・溝・祭祀・道路・水田・畑・窯など、土地に刻み込まれた不動産の痕跡を言います。対して土器や石器、木器、鉄器など、持ち運ぶことのできる動産的なものは遺物であり、遺構と遺物が一体となって残存したものが遺跡になります。

江戸時代に近郊農村だった北区には、都心部に比べ原始・古代の遺跡が数多く残存しており、長年の発掘調査でさまざまな遺構が発見されています。最も多い遺構は、竪穴住居跡です。それも弥生時代後期、ちょうど卑弥呼が活躍していた2・3世紀の竪穴住居跡は、正確に数えていませんが区内全域で優に千軒以上が発掘調査

されています。この発見数は、縄文時代や古墳時代、奈良・平安時代より圧倒的に多く、爆発的な人口増加があったことを物語っています。いわば北区の人口増のピークの一つです。とくに、飛鳥山から平塚神社にかけての西ヶ原一帯は、どこを掘っても弥生時代の住居が見つかるぐらいの密度です。また、縄文時代の住居や貝塚、古墳など、各時代の遺構が重複して発見されることから、土地の利用頻度の高さを表わしています。そして、古代の地方役所だった豊島郡衙、中世豊島氏の平塚城、近世の鷹狩御殿、近代の農事試験場や蚕糸学校が重複する遺構から「公」としての土地利用の特質が窺えます。(中島)

崖っ縁に立たされている!?!北区

中野守久(当館学芸員)

大地
水
人

当館の基本計画では「郷土風土」の明示を謳っていたが、改めて北区の地勢について再考したい。東京23区には自然史の観点で捉えると、武蔵野台地と東京低地という大きな地形単位が存在する。北区は武蔵野台地の北東の縁辺部に位置しており、今から約7千年前の有楽町海進最盛期に奥東京湾が生まれた際、波の営力で浸食され台地が後退し形成された海食崖が北西から南東にかけて連なっている。

当時北区と同じく波の営力を受けたと思われる区は、板橋・荒川・台東・千代田・港・品川・大田であろうか。北区と他区との間に有意差はないかと思い、これら8区において地形区分(台地・低地・河川)の面積を比較したのが付表である。この表で台地と低地の面積に注目すると、千代田・北区は面積がほぼ均衡していることが判る。これに次ぐのは港・品川区であるが、低地に比べて台地の面積がやや小さかったり大きかったりする。両区とも東京湾に臨んで埋立地を含む低地が広がり背後には台地が控え、崖際に鉄道が通っている。余談だが、この崖地では明治初期に招聘されたお雇い教師のモースやブラウンスが横浜と新橋を結ぶ汽車の窓から貝塚やローム層に気づいた逸話がある。さて、北区では台地と低地の面積を等分するように先の海食崖の崖線が走り、崖地の地形が長く連続していることは他の区にはない特色といえるであろう。

ところで、そうした崖地付近ではいかなる生活が見られたか。かつて赤羽北地区(旧袋村)で民俗調査をした際に、この地では住宅や畑が台地上に田圃が低地にあって土地は台地と低地にまたがるように所有されており、農業は台地と低地を行き交い営まれていたという話を旧家から伺った。そして、崖下には地下水の湧く水場があり、生活用水に利用していたという。同様なことは中十条地区(旧十条村)の旧家でも伺えた。ここでも台地上に住宅があり、上の畑と下の田圃をやはり共有し、日々畑と田圃を往復して農作業を行っていた。かつてこの地区の低地部の農業は石神井川の王子大堰に溜められた水を引いて用水にしていたが、崖下には赤羽北地区と同様湧水もみられたと思われる。



また、中十条地区の南に隣接する岸町地区(旧王子村)には名主の滝という江戸名所がある。ここでは崖地から滝のように幾筋もの水流が滴り落ちており、明治以降はそれを利用した保養・遊園施設に整備された。これら崖地に由来する湧水はいずれも層厚6mに及ぶ関東ローム層と下部の帯水層から滲出する地下水である。崖に沿う地区では類似の地質条件を備えていると考えられる。

台地と低地が二分する北区では崖地を介して村々が存在し、農作業では変化のある地形が利用され、崖下に湧く清水を用いた生活が営まれていた。水が得やすい環境は時として氾濫し人を悩ませる一方で、様々な糧や潤いをもたらしてくれる。現在、崖の上からは埋蔵文化財が数多く検出されているが、古来より生活に適した所として認識されていた証しであろうか。

有楽町海進時に波の浸食を受けたと思われる特別区の地形区分別面積

	台地	低地	河川	合計(km ²)
板橋区	18.38	11.96	1.56	31.9
北区	10.51	10.04	0	20.55
荒川区	0	10.18	0.16	10.34
台東区	0.84	9.16	0	10
千代田区	5.88	5.64	0	11.52
港区	8.3	11.18	0	19.48
品川区	9.7	6.54	0	16.24
大田区	8.35	31.22	5.44	45.01

出典：国土庁土地局国土調査課監修、『縮尺10万分1土地分類図(東京都)付属資料』、昭和51年(1976)、財団法人日本地図センター発行(復刻版)

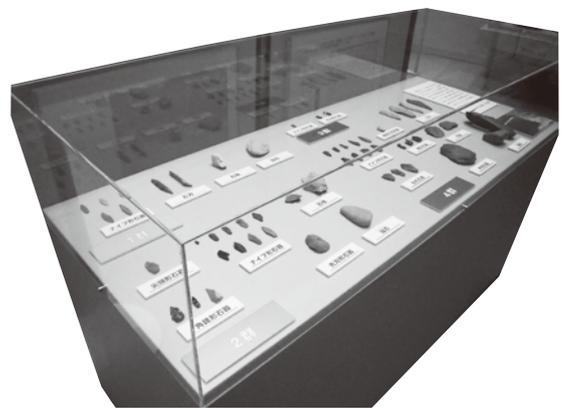
● テーマ展示「桐ヶ丘遺跡の旧石器」 ●

去る5月17日より10月16日までの間、常設展示室内の「最古の狩人」のスペースを利用して、テーマ展示「桐ヶ丘遺跡の旧石器」を開催しています。平成25年（2013）1月から10月にかけて、桐ヶ丘北小学校の跡地（赤羽北3丁目16番）において、東京都埋蔵文化財センターによって実施された発掘調査で出土した旧石器時代の石器を展示したものです。北区区内で行われる埋蔵文化財発掘調査の成果の一端を、多くの皆さまにご覧いただきたく企画しました。

この発掘調査では、これまでに区内で旧石器時代の発掘調査が行われたことのある御殿前遺跡や赤羽台遺跡での出土点数を

凌駕する、1,935点の石器および3,485点の礫が出土していますが、今回はその中から54点の石器を選び出して展示しています。普段の常設展示では見られない、区内では初めて出土した3万年以上前の斧形石器や、多数のナイフ形石器、大形の石刃などの資料をご覧いただくことができますので、ぜひこの機会に常設展示室へ足をお運びいただければと思います。

なお、展示資料を含む全ての出土遺物は、発掘調査終了後、報告書の刊行を経て、現在は北区教育委員会に移管されています。（牛山）



桐ヶ丘遺跡

桐ヶ丘遺跡は、赤羽北3丁目および桐ヶ丘1〜2丁目に所在する遺跡です。昭和32年頃より開始された都営住宅建設に伴う造成工事によって、遺跡の存在が明らかとなりはじめ、昭和34年（1959）には早稲田大学の直良信夫らによって発掘調査が行われ、旧石器時代の石器や礫が出土しています。残念ながら詳細については不明な点が多いものの、その調査

地点は桐ヶ丘北小学校跡地付近であったと思われます。また、旧石器時代の他にも弥生時代や奈良・平安時代の集落遺跡としても知られており、昭和35年（1960）に行われた、現在の桐ヶ丘中学校の敷地内における発掘調査等によって確認されています。

じっくり見てみて常設展示

孔の開いた土器の意味 —底部穿孔土器—

「弥生人のムラ」のコーナーに比較的大きな壺が展示されています。鏡を貼った展示台に浮かせる形で置かれ、底の部分が観察できるようにしてあります。つまり底をみてほしいのです。

この壺は田端西台通遺跡の弥生時代後期の方形周溝墓から発見されました。よく観察をすると、壺の全体は全く割れておらず、唯一底の部分に孔が開いており、割れた破片が接合されています。この孔は何かにつづかって割れてしまったのではなく、当時の人がわざと打撃をもって孔をあけたのです。孔の特徴から、壺の中に棒を入れ、その端を石などでたたく間接打法で開けたものです。その時割れた破片が近くで出土していることから、現地であるお墓でそのような行為を行ったことがわかります。

では、なぜ孔を開けたのでしょうか。壺は液体や顆粒状のものを容れる容器ですが、赤く塗られ文様が施されている様子は、中の大切なものを邪悪なものから守るという意味があるように思えます。それはコメやそこに宿る稲魂でしょう。だとすると、お墓において壺はその細い口から入り、中に宿

る死者の魂を守る容器であるといえます。底に孔を開けることで再びそこから現世に来ることができるようにと願いをこめたのではないのでしょうか。墓前における最後の別れの儀式を行った後に孔は開けられたのでしょうか。(鈴木)



イベントレポート

春期企画展

「糸と光と風景と —刺繍を通してみる近代—」

Event Report

3月15日(火)～5月8日(日)

この春、当館では近代の風景刺繍画を中心とする企画展を開催しました。

明治維新後、日本の刺繍が欧米へ盛んに輸出されるようになると、その需要を背景に、刺繍は将来有望な技術として特に女子の自立を目指す教育に取り入れられていきました。やがて、明治33年(1900)に設立された私立女子美術学校(現・女子美術大学)では、創立当初より刺繍科を設けて美術としての刺繍教育を展開。刺繍技術に加えて写生や図案の制作も重視した教育を実践し、卒業時には集大成として「刺繍画」が制作されました。その画題は動植物や静物に止まらず、現在女子美術大学に残る「刺繍画」のうち実に6割は風景を描いています。



そこで展示では、前半で近代の女子教育における刺繍について解説し、後半では明治後期から昭和初期の各地の風景を描いた刺繍画をご紹介しました。なかでも、観覧者の関心が高かったのは北区域や東京近郊を描いた作品です。それらの制作年が関東大震災の復興時期に集中しているにもかかわらず、ほぼ全ての作品が造営物ではなく自然風景や農地などをとらえ、消えつつある東京の原風景を写しとっていました。



同時に、当時の女生徒が自立の夢を託して一針一針描いた刺繍画は、今なお絹糸の輝きと初々しさに溢れ、観覧者からは近代という時代を彩った刺繍の美しさに、驚きと感動の声を多数いただきました。(久保望)

学芸員の本棚



横田冬彦編『読書と読者』、シリーズ〈本の文化史〉1、平凡社、平成27年(2015)5月刊行。

日本近世史において史料といえば、つい20年ほど前までは、和紙に墨でくずし字の記された手書きの文書を指しました。印刷された本は調査研究の対象とされなかったのです。そんな印刷された本に光が当たるきっかけとなったのは、阪神淡路大震災でした。かつての村名主らの蔵を救済する中で、そこに眠る多数の蔵書の存在が改めて見直されたことが、当時の諸書に記されています。これによって村の蔵書や蔵書目録、さらにはそれを読んだ読書記録、村内の人々への貸出記録などの分析が進みました。その先駆者の一人が、本書の編者である横田氏です。

江戸時代は庶民に至るまでが本を手にとれるようになった時代ですが、とはいえ今日に比べれば本は高価なもの。江戸時代の人々が本を読むといえば、学者でもない限り、家の維持・繁栄や生業・生活のために、必要にせまられて読むことが

多かったようです。例えば、村名主が業務の円滑化や地域の誇りのために、村方文書を読み整理し、それをもとに村の歴史書を編纂するといった具合です。自身や家・地域に必要な書物を選び、その中から必要な箇所を抜粋し、それを論拠に自身の知識や経験を加えて新たな書物を編む。これを横田氏は「知的読書の成立」と呼んでいます。読書は読者による知の再生産を伴う行為であり、読書という行為に「知の水準」を見ることができるといわけです。

このような村名主自らが地誌の編纂を行った事例として、北区では『下村記行』(文政～弘化年間(1818～48)カ、『北区史 資料編 近世2』「下村 富田家文書」所収)が知られています。江戸時代の北区域においても、読者による知的読書が行われていたのです。いわば江戸時代の人々の「本棚」を覗くような気持ちでひもときたい一冊です。(増田)

心ふるえる展示体験

—発掘された日本列島2016 新発見考古速報—

会場：東京都江戸東京博物館 会期：平成28年6月4日(土)～7月24日(日)

この展示会は、全国的に注目された発掘調査成果をいち早く公開することを目的に、平成7年(1995)より開催されてきた速報展示です。毎年、東京都江戸東京博物館での開催を皮切りに、1年弱をかけ各地を巡回しています。

この展示会の醍醐味はなんといっても、新聞やインターネットでしかみられなかったような最新の調査成果が間近に見られることにあります。中にはケースに入れられずにそのまま展示されている出土資料もあり、その迫力は満点です。またそれぞれには、出土地や年代といった基本情報がわかりやすく表示されているので、例年、実に考古学初心者から上級者まで楽しめる展示内容となっています。

さらにこの展示会の画期的な取り組みとしては、学生によるボランティア解説員の配置が挙げられるでしょう。かくゆう私も、かつてはその1人でした。いかにして資料のことを知ってもらい、面白いと思ってもらえるかと、苦しみながら解説した日々

のことは今でも鮮明に記憶しています。手を緊張で震わせながら、懸命に解説をする学生の姿をみるといつも、学芸員になることを目指し始めた時分を思い出し、心がふるえます。

今の時代、学生が実戦経験を積める機会は希少です。今後もこのような取り組みが続くことを願いつつ、自身でも増やしていけたらと決意を新たに展示体験です。(安武)



圧巻の
展示風景

写真にみる



あの日あの時

戦前のハイテク橋梁「田端大橋」

田端駅は明治29年(1896)に開業し、今年開業120周年となります。平成20年(2008)には、新しい田端駅ビルがオープンし、駅前も大きく様変わりしました。写真は、昭和37年頃の田端駅前の様子です。手前に見える屋根が田端駅の駅舎で、駅前はロータリーになっています。奥に向かって伸びている道路は田端大橋で、両側の歩道には、通行する人も見えます。元々、田端駅には低地側と台地側をつなぐ人道橋が架かっていましたが、昭和初期、付近の発展に伴い交通量が増大したことから、東京府と鉄道省が協議し、田端大橋および接続する道路の整備が行われました。駒込動坂方面から下田端を経て明治通りへ至る計画道路のための跨線橋として作られた田端大橋は、昭和10年(1935)に完成しました。すべて電弧(アーク)溶接を用いて作られた鉄骨造で、写真に見える歩道と車道を隔てる壁状のものが橋の主桁になります。それまでの鉄骨造の橋梁はリベットで接合することが一般的でしたが、全長134mの田端大橋は、当時実用化が進んだ電弧溶接を本格的に採用し、溶接橋梁としては世界的な橋長を誇りまし

た。橋桁の製作は神戸に所在した川崎造船所艦船工場が請け負っています。田端大橋は、桁と橋脚部を保存し、その上に歩行者通路を新たに設けた「田端ふれあい橋」として現在も使われています。(山口)



田端駅前と田端大橋 倉田正義氏提供



博物館インフォメーション



人物往来

平成22年(2010)4月から館長に就いていた大石喜之が3月31日付で異動となり健康福祉部に転出しました。後任には前中央図書館長の山本三雄が着任しました。今後とも宜しくお願いします。

新規ミュージアムグッズ紹介

平成22年(2010)4月から販売していた当館オリジナルキャラクター「コン吉」のぬいぐるみが品薄となったことから、10月より新たなデザインのぬいぐるみが登場します。乞うご期待!



常設展示観覧料の無料デー!

きたる10月1日(土)・2日(日)の「区民まつり」と11月3日(木・祝)の「文化の日」は当館の常設展示観覧料が無料となります。皆様こそってお越し下さい。

博物館資料情報をお寄せ下さい

当館では赤羽・王子・滝野川といった現在の北区内で使われていた生活用具・古文書・古写真など当時の暮らしぶりが分かる様々な資料を常時探しています。心当たりのある方はぜひ博物館(03-3916-1133)までご連絡下さい。



【秋】10月～12月

<展示>

- 秋期企画展「近代工業化のルーツ滝野川反射炉展 ーまなぶ・つくる・うけいれるー」(10/25～12/11)
- 関連セミナー(11/5)
- 関連記念講演会(12/3)
- 関連レクチャー(12/4)

<イベント>

- 飛鳥山3つの博物館合同企画GO!ゴー!ミュージアム 2016「勾玉ストラップをつくろう!」(10/1・2)
- 文化財講演会「子は宝ー地域にみる子育ての民俗学ー」(11/3)
- 文化財公開事業「稲付の餅搗き唄」の実演と体験(11/26)

<講座>

- 東京9区文化財古民家めぐり「旧松澤家住宅説明会」(10/10)
- サロン講座北区モノ語り「石材からたどる古墳時代の北区」(10/15)
- 東京文化財ウィーク北区文化財めぐり(10/16)
- 江戸庶民のよみものーご当地編ー(10/23)
- 晩秋の日光御成道を歩き歴史を訪ねる(10/29)
- 考古学講座遺跡に行こう! 秋(10/30・11/6)
- あすかやまのどんぐりで「でんでんたいこ」づくり(11/13)
- 川柳で読みとく江戸散歩(11/19)
- サロン講座北区モノ語り「王子といえば・・・稲荷と狐」(11/20)
- 江戸庶民のよみものー狐編ー(11/27)
- 北区遺跡学講座2016秋「田端西台通遺跡」(12/10)
- サロン講座北区モノ語り「キカイを動かせ」(12/17)
- 第29回新聞から読む考古学ー2016年下半期を振り返るー(12/25)

【冬】1月～3月

<展示>

- あすかやま十二支一西一(12/13～1/31)
- 来て、見て、さわって!昔の道具(1/7～2/28)
- 関連ギャラリートーク(1/9・2/5)
- 春期企画展「名所物語館蔵浮世絵にみる北区の名所」(3/11～6/18)
- <回想のための>テーマ展示「オボエテマスか?ーあの暮らし・この道具ー」(3/11～6/18)

<イベント>

- 飛鳥山3つの博物館合同企画「飛鳥山1日大学」(2/18)

<講座>

- サロン講座北区モノ語り「土偶の神秘」(1/14)
- 北区の考古学<地域編>王子・滝野川(1/21・22・28・29)
- サロン講座北区モノ語り「富士講御三幅の神秘」(2/11)
- お江戸の教科書一名所編一(2/19)
- 考古学講座遺跡に行こう! 春(3/4・5)
- お江戸の教科書ーご当地編ー(3/26)

※催し物は仮称のものも含まれます。()内の実施日は予定です。詳細は、当館発行の催し物案内、北区ニュース、ホームページをご覧ください。

北区飛鳥山博物館より	
ばいす37	
発行日	平成28年9月20日
編集・発行	北区飛鳥山博物館 〒114-0002 東京都北区王子1-1-3 TEL. 03-3916-1133
印刷	東京リスマチック株式会社

学芸員リレーエッセイ
博物館いろは歌留多

突然ですが、引っ越しは好きですか? 知人に引っ越し好きがいて、2年くらいでコロコロ住所が変わっています。気分が変わっていいのだからか。

かくいう私も、今年の夏に引っ越しをしました。私の場合は、気分云々ではなく、増える一方の本と書棚を置くスペースがなくなってしまったから。やむにやまれずとは言っても、本を小さな段ボールに詰めていく作業を引っ越し前夜に徹夜でやり、いやはや、くたびれました。

本が捨てられず置場に困る、という悩みは学芸員の間でよく出る話。「本は仕事に必要なので捨てられない」という理由を聞くと、うんうん、と思いますが、趣味のものもやっぱり捨てられずに増えていくという話を聞いていると、本は仕事の道具云々よりも、資料を収蔵する博物館に勤めるものの職業体質なのでは、という気もしてきます。

増大するモノをしまう場所に苦勞するのは、個人も博物館も同じです。飛鳥山博物館も、地下の収蔵庫には資料がぎっしり。資料に負担をかけずにいかにコンパクトに収蔵していくか、思案のしどころです。「ドラえもんのスモールライト(あとビッグライトも)があればよいのに!」というのは、きっと学芸員共通の心の叫びなのでは?(田中)

利用のご案内

【開館時間】

午前10時から午後5時
※観覧券の発行は午後4時30分まで。

【休館日】

月曜日
(月曜日が国民の祝日・休日にあたる場合は開館し、直後の平日が休館)
年末年始(12月28日～1月4日)
※このほかに臨時休館日があります。

【常設展観覧料】

	個人	団体	三館共通券
一般	300円	240円	720円
高齢者(65歳以上)	150円		
小・中・高	100円	80円	240円



- ・JR京浜東北線 王子駅南口より徒歩5分
 - ・地下鉄南北線 西ヶ原駅より徒歩7分
 - ・都電荒川線 飛鳥山停留場より徒歩4分
 - ・都バス 草64、王40系統 飛鳥山停留所より徒歩5分
 - ・Kバス(北区コミュニティバス) 飛鳥山公園停留所より徒歩3分
- ※飛鳥山公園に隣接して有料駐車場がございます。

- ・小学生未満は無料
- ・団体扱いは20名以上
- ・三館共通券は当館のほか、渋沢史料館・紙の博物館をご覧ください。

編集後記

国民の祝日「山の日」を初めて迎えるにあたり、先月洋紙原料の産地にもされた大井川源流部を逍遙しました。桐・榎・唐檜等の大森林が広がる中で、清冽な水と空気を感じてきました。飛鳥山は地形的にいわゆる山ではないのですが、山つながりというご縁で、このブームにあやかりたいと願っています。

当館では下半期も多くの魅力ある催しを企画し、皆様のご来館をお待ちしています。秋の気配が漂い始めた飛鳥山公園へどうぞそぞをお運びください。(中野)